

## 道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 27 年度 第 1 号 2015 年 9 月 30 日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構  
函館水産試験場 調査研究部  
TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

### 平成 27 年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1 次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2015 年 8 月 29 日～9 月 2 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～500mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を下回った。
- ・ 魚群反応の強い海域は登別～白老沖。
- ・ 反応の比較的強い水深は 200～250m（海底に張り付いた反応は 250m付近）。
- ・ 漁獲物は、尾叉長 45cm 前後が主体。
- ・ 水温は、深度 50m以深はほぼ平年並み。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振海域の 182、185 海区（登別～白老沖）には強い反応がありました。また、渡島海域の 193 海区（恵山岬沖）にも比較的強い反応がありました（図 1・2）。
2. 海域平均の反応量は、卓越年級群となった 2005 年級群（平成 17 年生まれ）が 4 歳となって産卵加入した 2009 年以降では、2013 年に次ぐ低い値となりました。ただし、登別沖には前年度に引き続き強い魚群反応がみられました（図 3）。
3. 魚群反応は、水深 150～500mの範囲に観察されました。特に水深 200～250m にかけて強い反応がみられましたが、海底に張り付いた反応は水深 250m 付近が中心となっていました（図 2・4）。
4. トロール調査の結果、苫小牧沖の水深 250m 付近の漁獲物は尾叉長 40～50cm（主体は 45cm 前後）のスケトウダラ成魚と尾叉長 10cm 前後（0 歳）および 20cm 前後の未成魚（1 歳）となっていました（図 5）。なお、南茅部沖の水深 230m 付近の漁獲物には、0 歳魚の割合がかなり高くなっていました。そのため、図 1 に示した魚群の分布図および図 3 に示した魚探反応量のグラフからは未成魚とみられる反応を除いています。
5. 調査海域（登別沖）の水深 50m以深の水温は、水深 100～150mおよび 250～300m付近までは平年（2002～2014 年度のこの調査における平均値）よりもやや高く、深度 150～200m付近はやや低かったものの、おおよそ±1℃前後の変動となっており、ほぼ平年並みと考えられます。スケトウダラの生息に好適とされる 5℃以下の水温は、水深 160m 以深にあり、昨年の同時期よりやや浅い水深帯にみられました（図 6）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11 月）の状態を予測するために実施しているものです。12 月以降の状況は、11 月下旬に実施する分布調査（2 次調査）により予測する予定です。調査終了後にまたスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

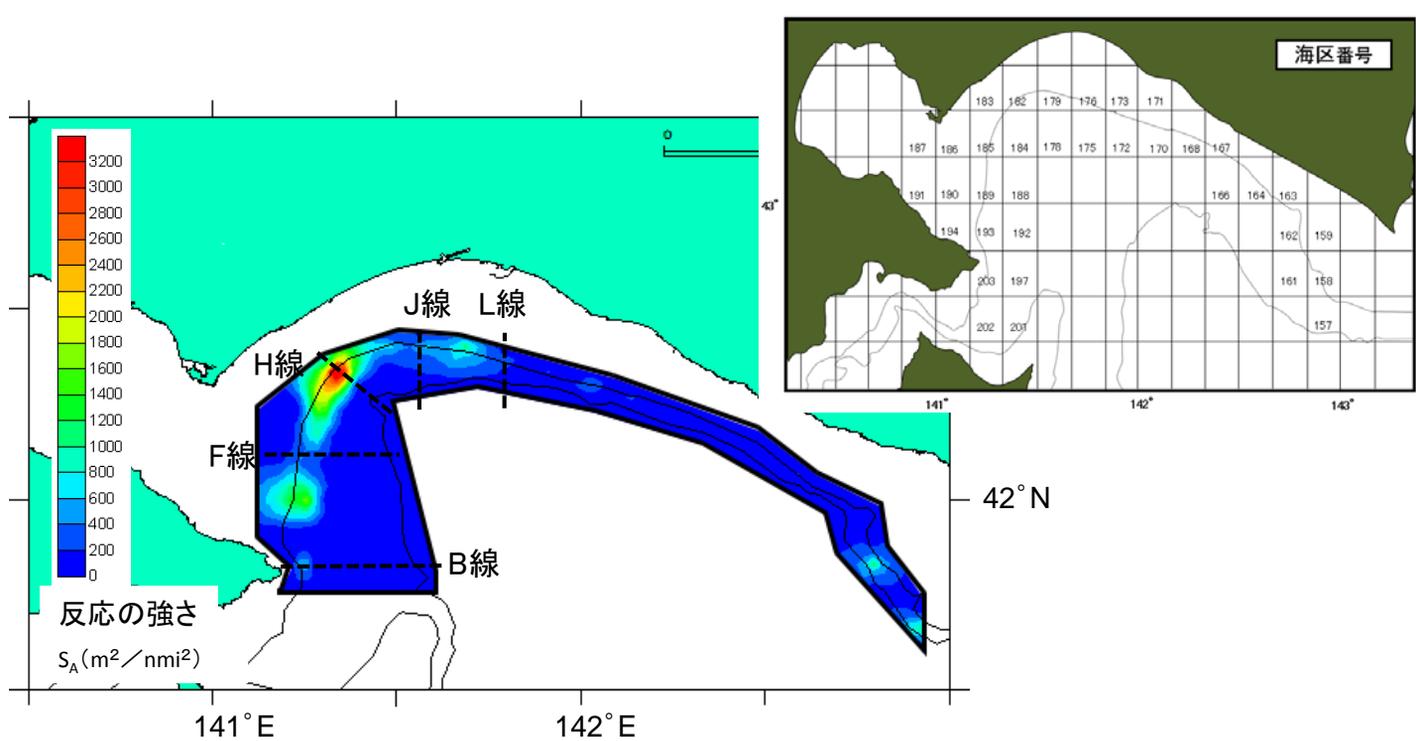


図1 調査海域における魚群の分布

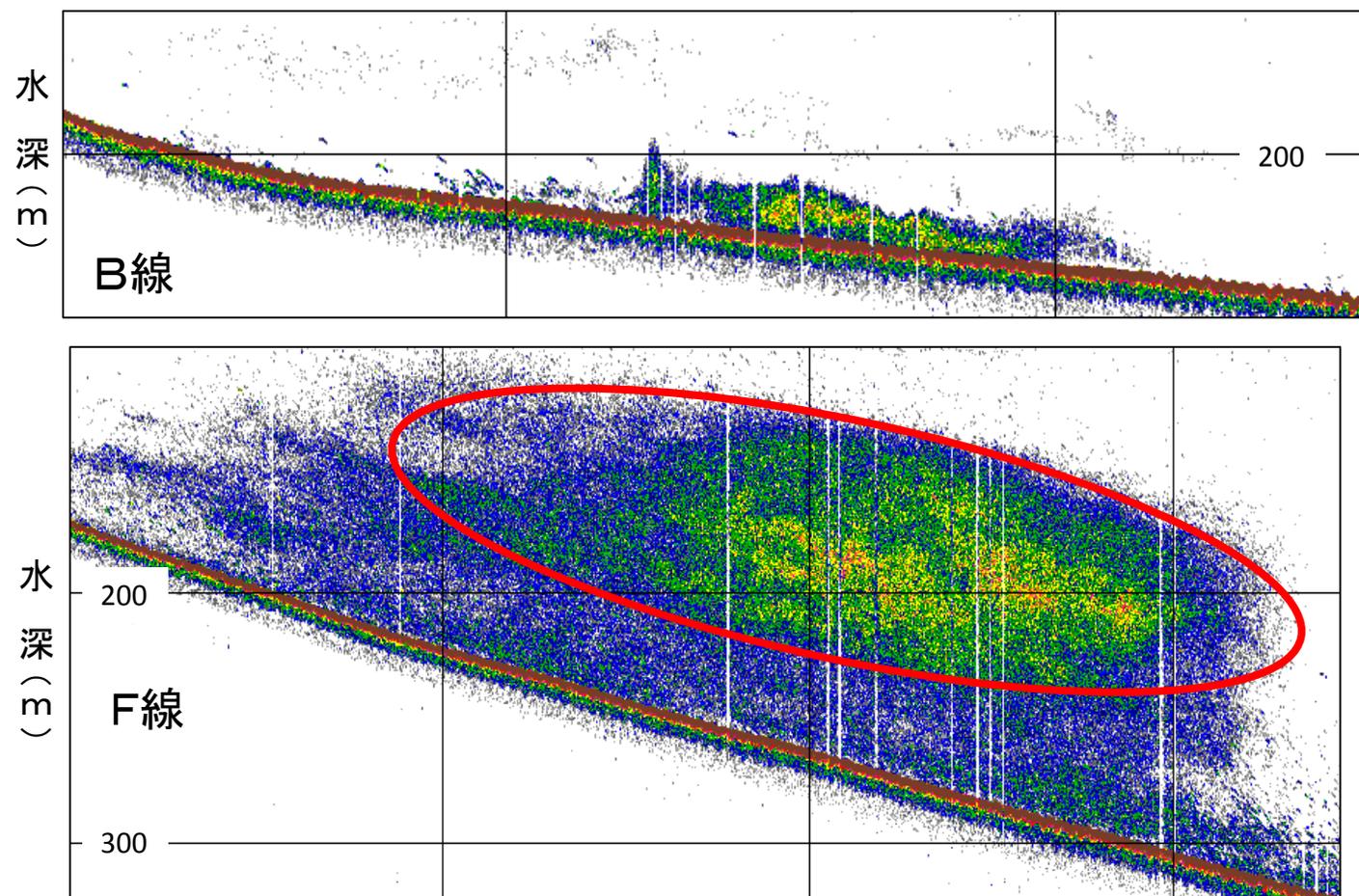


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像) ※赤枠内の反応は未成魚とみられる  
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

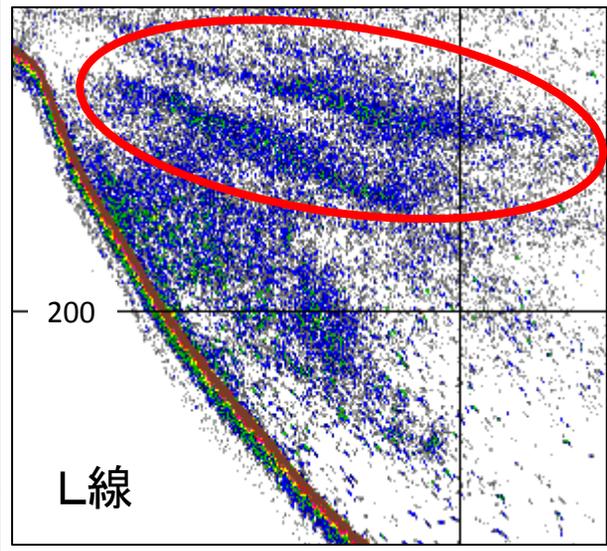
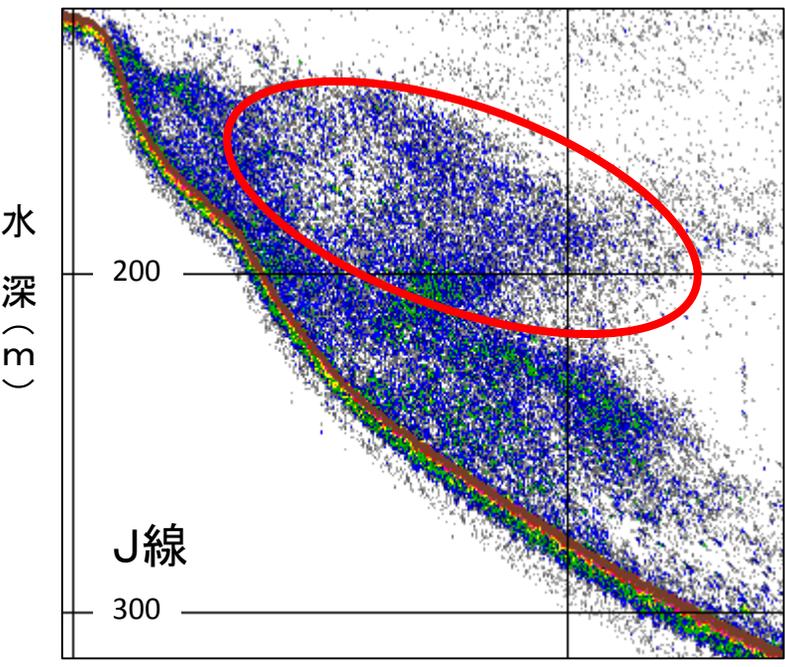
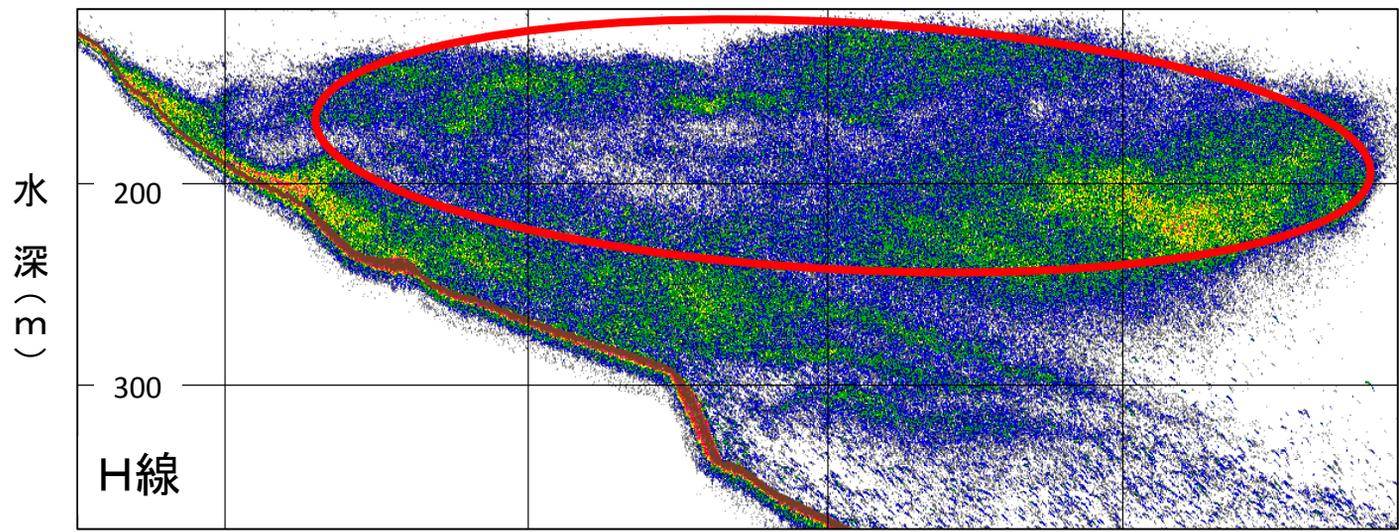


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき ※赤枠内の反応は未成魚とみられる  
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

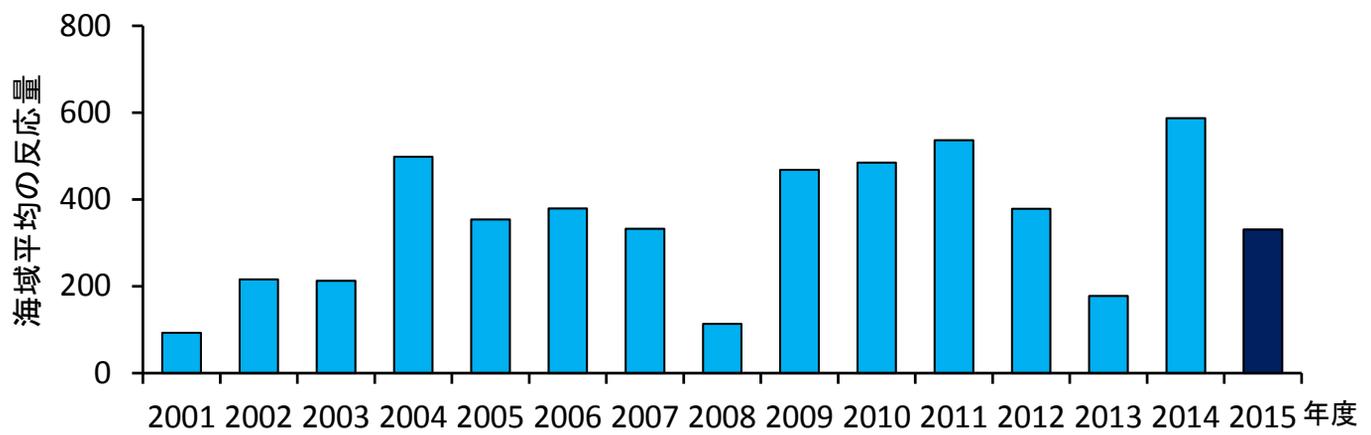


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

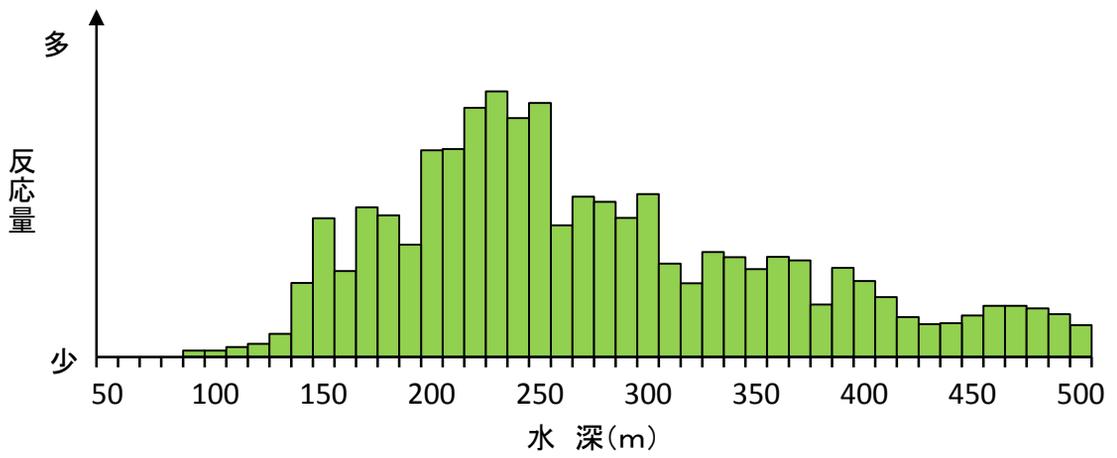


図4 水深別の魚探反応量

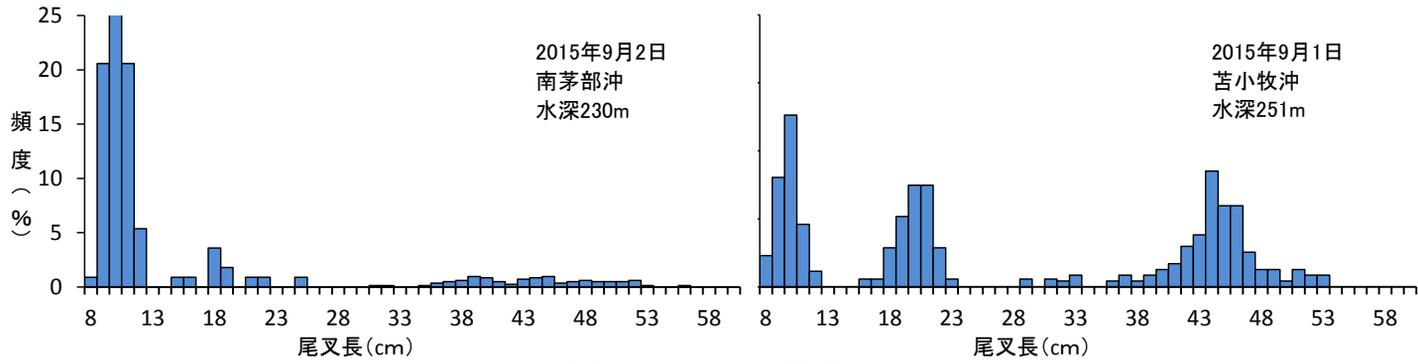


図5 漁獲物の体長組成

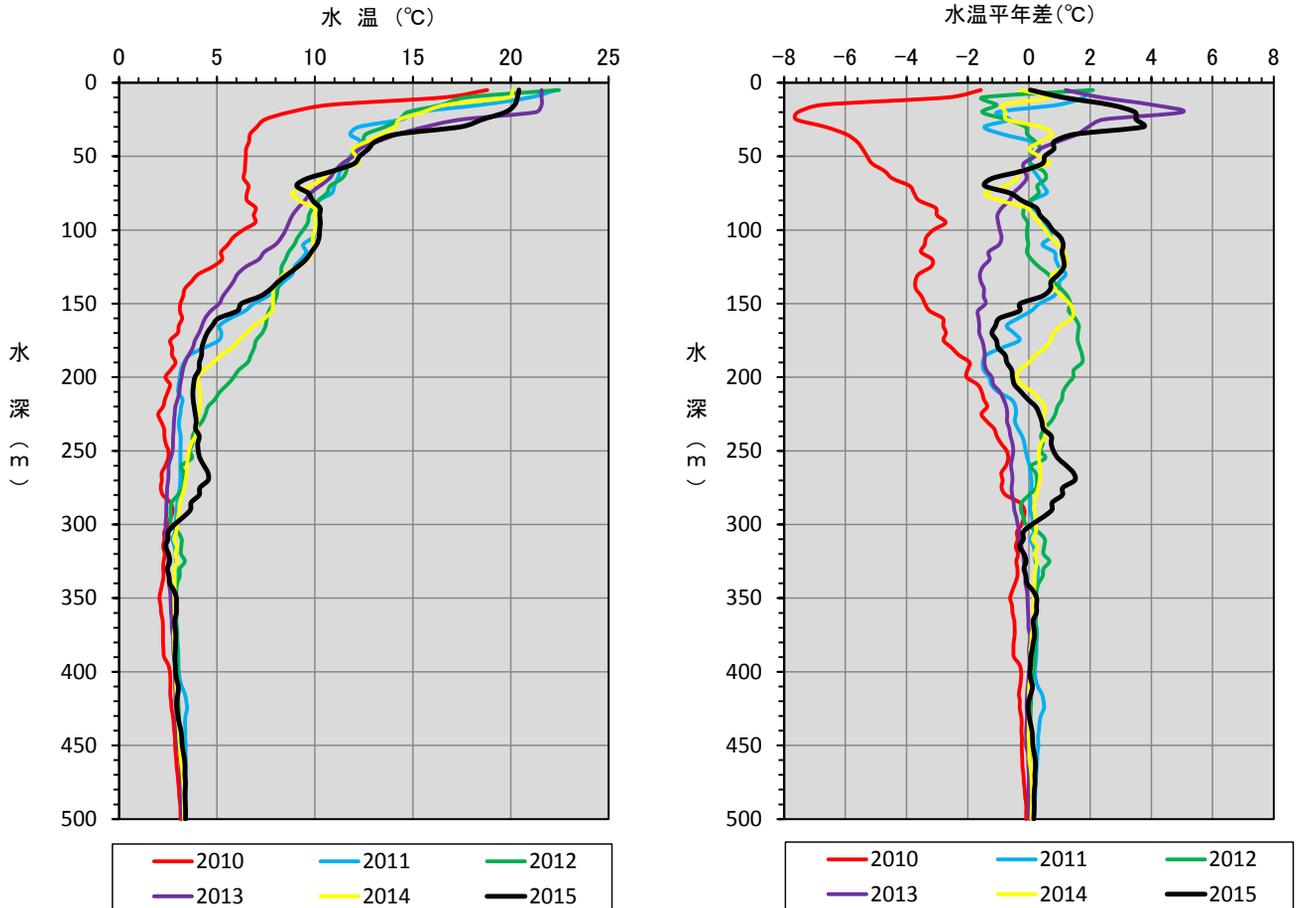


図6 水温の鉛直分布および年差 (8月下旬:登別沖)